



九州・沖縄作曲家協会
会長 吉田 峰明

「九州・沖縄作曲家協会」は1980年に創立、九州・沖縄ゆかりの作曲家たちを中心に、現代音楽の普及・発展とともに「地域社会に根ざした音楽の創造は如何にあるべきか」をテーマに活動しています。会員数は約50名を数えます。

活動の中心は「九州・沖縄現代音楽祭」で、これまで毎年、九州沖縄の各地にて開催されてきました。その他「スプリングコンサート」「春の音楽展」「セレクトティブコンサート」などの演奏会も開催してきています。また国際交流にも力を入れ、これまで嶺南作曲家協会(韓国)、上海作曲家協会(中国)と交流を重ね、今後さらにいろいろな交流を計画中です。

機関誌として毎年「会報」を発行していますが、一昨年このJournalをスタートさせました。これは外部に向けての広報として、会員作曲家の取り組み状況を発信していくものです。今後は演奏家たちとの交流をより盛んにし、新たな分野にもチャレンジしながら、多くの方々のご理解とご支援を得られる協会となるよう努力してまいります。

音楽雑考

田村 徹(九州・沖縄作曲家協会 前会長)

『「地域と音楽」というテーマで書いて下さい」という依頼であったが、テーマの大きさから考えると、与えられた字数でまとめる筆力など持ち合わせないので、最近考えているいくつかを列記することでお許し願いたく思います。

1. 日本地域と音楽 日本では邦楽と洋楽という二流が反発と同調を繰り返しながら新しい音楽を生み出すエネルギーとなっていて、日本という地域特有の新しい音楽文化を創りだし、世界に発信できる…という幻想に囚われながら半世紀以上も音楽活動をしてきたのであろうか？
2. 世代と地域 世代ごとのカテゴリーを地域と呼ぶならば、ラジオ世代の音楽は「聴くため」の音楽であったが、テレビ世代の音楽は「見るため」の音楽が主流である。聴覚に作用する音楽から視覚(または視覚聴覚)に作用する音楽へ変貌しつつあるのだろうか？
3. 洋楽地域 洋楽の記録は「線とOの組み合わせ」という簡便さでできている。また音高を世界共通にしたことにより、洋楽が容易に国境を越えて地球規模に広がった。この伝播力には敬意を表するが、紙文化からパソコン・人工知能文化へと変貌しつつある時、音楽の様相がどのように変化していくのであろうか？
4. 宇宙の地球地域 地球地域を支配する「経済効率」と言う尺度で音楽の質を評価する社会は何時まで続くのであろうか？



伝統や地域に関する作曲活動

木橋 彩音



前回、私の地元の民俗をもとに「猫神」を作曲しました。この民俗については私の学生時代の歴史の授業で教わりました。当時から動物好きの私にとって、悪いことをしたら動物が悪霊となって襲ってくる、と聞いてとても恐ろしくなり、たまらず耳を塞いだことを覚えています。このことから民俗というと「怖い、恐ろしい」というイメージを持つこともありますが、あらためて内容を思い返してみると、ただ恐ろしい話ではなく、人や動物、生きものすべてを大切に扱うこと、人として大事にしなければならないことが語り継がれている、そこに民俗の魅力があると感じました。実際、現代まで廃れず、伝統や地域の民俗が受け継がれてきたということは、現代の我々にも必要とするものがあつたからではないでしょうか。今後も様々な伝統や地域の民俗をもとに私が思う作曲をしていきたいです。

<特別企画> テクノロジーと音楽

対談：米倉豪志 × 熊本陵平

熊本：今回は人工知能という最先端技術に携わりながら作曲活動を行っている、九州・沖縄作曲家協会会員の米倉豪志君と「テクノロジーと音楽」をテーマに対談を行います。米倉君、どうぞよろしくお願いいたします。まず米倉君の作曲活動のバックグラウンドからお聞きしたいのですが、いつから作曲をするようになりましたか？

米倉：よろしくお願いいたします。作曲自体は結構幼い頃からやっていたと思います。僕の叔母がピアノの先生で、彼女が変わった人で結構現代音楽に触れさせられていたのね。ウェーベルンとかチャンスオペレーションとか、そういうので遊んでいたのを覚えている。作曲自体もその一環だったと思う。最初は12音技法とかを触ってたように思います。その方がある程度自動的に書き進められるからだったかもしれないね。僕の場合はそういうの後に和声法とかを習い始めた感じです。でもその後はずっと独学で、君もご存知の通り、アメリカで会った頃とかは書きたい曲が書けなくて悶々としていました。その後もずっと独学してきて今に至ります。

熊本：こんなふうになるとは思ってたな(笑)。僕は近年時代に逆行してどんどんアナログの方向に進んでるんだけど。趣味のカメラもデジタルからフィルムへ、ついに自分で現像するようになったし。作曲も最近はミニマリズムにバロックの様式を当てはめたり、ソナタ形式を再認識するようになったわけだけど、米倉君の場合はちょうどこの僕の動きとは逆だよ。作品制作する時、どんなことを思いながら制作してるの？

米倉：僕自身は僕の曲はとてもアナログな思考で書かれていると思っています(笑)。特に選択の際にそれは顕著に現れるんだけど、それはそれとして、僕は特に作曲の手法の部分にテクノロジーを導入していて、おそらくケージのチャンスオペレーションとブレスなどのトータルセリーの影響が強いです。最初に触れた手法がそういうのだったからそれが僕の中で自然なんだと思う。

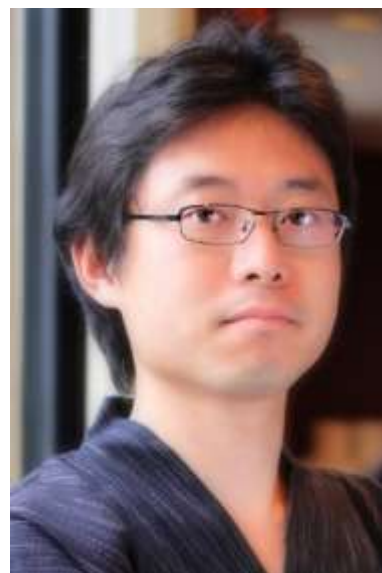
熊本：実際、君の作品を聴くとすごくデジタル的に感じたりするけど。

米倉：現象上はまた別の話だよ。で、構造ってのは人間とはまったく関係なく別のものとして存在している。それってロマンじゃん？僕はロマン派の作品があまり馴染めなくて、それはロマン主義、つまり人間主義がロマンチックに感じられない(笑)。それよりも人間を超えた、人間の意思や情緒とは無関係ななにかが存在していて、人間がそれに解釈を与えているだけのちっぽけな存在だという考え方の方にむしろロマンを感じるんです。

熊本：なるほど。

米倉：だから僕は作曲の手法にテクノロジーを使う。これは人間としての自分を超越するためです。例えばベートーヴェンのような構築的な手法を、コンピューターを使って極限まで複雑にやることができる。で、ベートーヴェンとかの場合って、その構造が人間の耳で感得できるじゃない？それによって物語るといふか。それが極限まで複雑になると人間には感得できなくなるわけ。そうすると、現象と構造が分離される状態が生まれる。それが欲しいの。これがどこまで人間とは無関係に作れるかというところにテクノロジーを使う。で、ぐるっと回ってどこをどのように切り出すか？というところに僕の人間としての感覚が使われる。

熊本：どこをどのように切り出すかっていう感覚はなんとなく分かる。WAVE音源なんかを採譜ソフトでデータ読み取らせるとほんと無数に音高があって、どこをどう切り取るかっていうのは問題だったな。しかしこれってネット上に膨大に高速で駆け巡る情報のどれを切り取って、それだと特定できるかという感覚にも似てるよね。まさに現代的感覚。そういえば、近年様々なコンピュータソフトの発達で作曲家のワークフローは随分変わってきたよね。例えば、僕が大学にいた頃は浄書ソフトのフィナーレはまだプリミティブな機能しか持ち合わせておらず、こんな感じなら手書きの方が早いやと思ってたんだけど(笑)。今じゃかなり発達して外せなくなってきた。パソコン独特のコピー&ペーストなんか手書きじゃ絶対できないことだし、面倒な移調もワンクリックでできるようになったよね。それから、以前君がやって僕が真似してみたスマホの機能を利用してのフーリエ変換(笑)。あれなんか僕にとっては衝撃的だったよ。スマホ片手に持ってサンプリングとか。昔のバルトークとかコダーイはエジソンの初期蓄音器を持って旅に出たわけだけど、彼らも生きてたら絶対ス



米倉 豪志

マホ使ってると思うね。これから作曲家をとりまく環境ってどんどん変化していくんだと思うけど、今君が携わってる人工知能の仕事からどのように変わっていく可能性があると思う？

米倉：人工知能なんだけど、これは決定的に音楽の作り方を変えちゃうと思う。まず、もうベートーヴェンの第10交響曲なんかは人工知能を使うと作れるでしょう。これはディープラーニングとか機械学習というような手法を使うんだけど、膨大な音楽を学習させて、ベートーヴェンも学習させるのね。で、その差異を抽出すると、ベートーヴェンのモデルというものが出来上がる。このモデルで人工知能が作曲すると、ベートーヴェンらしい曲ができるのね。しかも時系列まで考慮に含めることができるので、1、2、3、、9と交響曲の順番があって、その間にいろんなソナタやらなんやらがあってという学習条件を与えてやると、第10交響曲はこんな感じってできちゃうわけ。これ、何が起るかというと、写真技術が生まれたときの画家の経験と同じことが起る。つまり、リアリズムの技法は写真が出てきたときに終わっちゃったわけで、その後、抽象とか画面の分割とかそういうことが始まって、もっといくとスーパーリアリズムとかで写真を真似るとかも出てくる。これと同じことが音楽でも始まる。職人技で食っていく音楽は人工知能に取って代わられると思う。ラヴェル風とかジョン・ウィリアムズ風とかサクッと作れちゃうから。可能性として面白いと思うのは、作曲技法の歴史を全部学習させると、次の世代で重要となる技法などが人工知能で予測できたりすること。で、それをもとに新しい音楽の探求をする。つまり、これまで人間が人工知能に学習させていたのが、逆に人工知能が人間の次の行動を指し示すようになる。これは確実に起こります。



熊本 陵平

熊本：恐ろしいな(笑)。

米倉：で、そうなった時、僕はこれよく言ってるんだけど、純粋に芸術音楽の復権が始まるんですよ。芸術とはなにか？ということ。人工知能が作った音楽作品には一つだけ重大な欠点がある。それは、ベートーヴェン風の音楽とか、レンブラント風の絵画とかはもう完璧なレベルで作れるんだが、その元となる〇〇風の〇〇の部分にはなり得ないということなの。だから、職人的な工芸的な作品を書く作曲家は全部人工知能に駆逐されるんだけど、その人間の一回性の人生と緊密に絡み合った作品を残す作曲家は、〇〇風を構築する〇〇という形の元素材としてちゃんと居場所が確保される様になるわけ。

熊本：なるほど。結局高いオリジナリティを持つものが生き残るということだね。今日はどうもありがとうございました。

米倉：ありがとうございました。



「テクノロジーと音楽」について

三村 磨紀予

「テクノロジー」という言葉を辞書で調べてみると「科学技術」と書いてあった。私は科学とは、存在、物質から出発した学問だと考えている。また、人間の五感、脳で観察し判断し、その結果が再現可能であることを条件とし、そのメカニズムを体系化させるものだと考えている。つまり「この世界、宇宙がある」ということを前提にして「見える世界」の中で展開されるものだと思う。それに対して、音楽とは「音」は見えない。また、心やイメージの世界が創作の源になるとすると、それもまた観測することはできない。そしてそれが実際の作品になり奏でられる時、聴き手のその瞬間の感情やインスピレーションも見ることにはできない。そう考えると、人間は見えない世界の本質的な部分を音楽から直感的に受け取っているのではないか、と思う。テクノロジーが発展すればするほど「人間にしかできないことは何か」という問いが深まる。そのことで更なる人類の可能性、音楽の未来が開けてゆくことを願っている。

§ 協会事業のご案内 §

♪第 38 回九州・沖縄現代音楽祭について♪

実行委員長 原田 大志

2018年9月1日(土)福岡市あいれふホールにて標記音楽祭を開催します。今後の会の発展を考え、一歩踏み込んだ内容を盛り込みました。具体的には以下の3点です。

- (1) バンクーバー・インターカルチュラル・オーケストラ(略称 VICO)との交流の手始めとして、リタ上田作曲オペラ《千の鶴の物語》の上演
- (2) VICO メンバーによる民族楽器のワークショップ(9月2日(日)福岡市博多区「さざんびあ博多」第一会議室)
- (3) 地元起業家・邦楽演奏家・本協会会員のための「ミートアップ」(9月1日(土)演奏会前・同フロア講堂)

このように内容が多岐にわたるものになったため、総括する名称として「西海岸国際現代音楽祭α」が米倉理事より提案されています。以上、これからの協会の新しい方向性を探る第一歩としてふさわしい催しにする所存で、ギルド・ムジカ九州のメンバーを含む実行委員一同頑張りますので、よろしく願いいたします。

♪カナダ公演について♪

実行委員長 米倉 豪志

2019年カナダでの公演についてご報告します。まず既報のとおり、カナダ・バンクーバーの演奏家団体 Vancouver Inter-cultural Orchestra (以下 VICO) からの招聘を受けることとなります。これは、2020年に日本側で VICO を招聘してのコンサートを開催することで文化交流をはかるという条件のものとなります。毎年6月にバンクーバーで1週間開催されている VICO 音楽祭で、九州・沖縄作曲家協会会員からの出品作が演奏されます。1週間のうち、何日間かに分けて演奏される予定です。招待作曲家は最大6名までとなっており、2020年に日本側で開催する際も6作品を招待することとなります。VICO は世界中からカナダに集まった民族楽器奏者と西洋楽器の奏者によって構成されており、出品者には提示された民族楽器を用いたアンサンブル作品を書いていただく必要があります。出品採択された作曲者は9月2日に開催されるワークショップへの参加をお願いいたします。このワークショップに VICO から以下の奏者がいらっしゃいます。Pipa、Santoor、Danbau、Sho。また、VICO と関わりの深い作曲家、リタ・ウエダさんとマーク・アルマニーニさんの2名が参加し、作曲上の注意などをお教えください。このワークショップに参加の協会会員はサンプルとなる楽譜をお持ちいただくことも奨励されており、具体的な演奏を通して詳細な打ち合わせをすることも可能となっています。

♪第 39 回九州・沖縄現代音楽祭 in 宮崎について♪

実行委員長 衛藤 恵子

2019年宮崎市での音楽祭開催は、2004年に「第2回東アジア国際現代音楽祭」と同時開催して以来です。また、この15年間に宮崎市や都城市で「春の音楽展」や「九州・沖縄現代音楽祭」を開催し、宮崎県内外の演奏家はもちろんのこと、多くの国内外の作曲家とともに素晴らしく質の高い音楽を創造することができました。おりしも2019年は「オーストリア・日本交流 150周年」にあたり、ウィーンから作曲家を招聘して現代曲作品を演奏するという条件で「オーストリア文化フォーラム」より助成金公募がなされています。そこでこの条件を満たすべく、以下の要領で音楽祭を企画しました(予定)。*青字は会員向け情報

日程：2019年9月下旬(ホール予約は2018年9月1日以降)

会場：宮崎市市民プラザ「オルブライトホール」(497席/ピアノ2台)

作品：自由(7分前後の室内楽曲)/自作自演・指揮を含む/10作品発表予定

招聘作曲家(助成金獲得の場合)：Dietmar Schermann(ディートマル・シェルマン/作曲・指揮/ウィーン国立音楽大学作曲科教授)

演奏者：宮崎県在住の演奏家(Sop. Ten. Fl. Cl. Sax. Vn. Vc. Pf.より選択/演奏家は紹介可能)、もしくは同伴の演奏家(編成自由)

出品料：2万円(2.5万円相当のチケット配分) *2件の助成金が得られた場合には返金

演奏者謝礼：作曲者が負担(2件の助成金が得られた場合には一部補助)

助成申請：「オーストリア文化フォーラム」「日本芸術文化振興基金」

今後の日程：

演奏会告知：今回 Journal/9月2日(日)総会

参加意思申し込み：2018年9月末日まで(10月末の2件の助成要望書提出のため/曲目等詳細が分かれば教えてほしい)

詳細発表：2019年4月発送会報(3月末の助成内定結果・出品者数・決定事項の発表) 楽譜提出：2019年7月末日

お問い合わせ：音楽祭実行委員長 衛藤恵子 0985-85-5764 etokei@mub.biglobe.ne.jp

<九州・沖縄作曲家協会> <http://kcaj.net/>

〒889-1605 宮崎市清武町加納乙 62-62 (衛藤方) /Tel.0985-85-5764 /E-mail etokei@mub.biglobe.ne.jp